



(財) 第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494



シンボルマーク
思想、信条などの違
いを超えて、人道主

私たちに、忘れていいこと、忘
れてはならないこと、の二つがありま
す。昭和二十年八月六日の広島、九日
の長崎、昭和二十九年三月一日の第五
福竜丸。これは全世界の人びとが決
して忘れてはならないことです。世界
のどこかで、今も紛争があり、核戦争
の危機は今も私たちの頭上を覆って
います。平和というものは、じっと待っ
ていても、決してやってくるものでは
ありません。私たち自らが、一歩でも
二歩でもあゆみを進めることによって
のみ、手にすることができるとい
えます。

西宮での平和・非核への取り組みは、
第五福竜丸事件を契機に全国各地で盛
り上がりを見せた原水爆禁止運動の動
きに合せて起りました。昭和三十
一年に、第一回の原水爆禁止西宮市民
大会が開かれ、昭和
三十三年には、政党、
政派、主義、主張、
を越えて、人道主

義の立場で、全市民的な運動を行う、
原水爆禁止西宮市協議会が結成され、
幅広い運動を行っています。
西宮市と原水爆禁止西宮市協議会な
どは、昭和三十年代から五十年代のな
かばにかけて、講演会や映画会、市民
集会などを行っていました。初めて「
原爆展(当初はヒロシマ原爆資料展)」
を開いたのは昭和五十五年です。戦争
の悲惨さを知らない世代が増えるなか
で、被爆体験の風化が心配されつつあ
った当時、より強く原水爆や戦争の惨
状を次代に語り継ぎ、平和を訴えよう
と開いたものです。

その「原爆展」では広島平和記念資
料館から借用した、原爆で焼けただれ
たカラなどの現物資料を展示、多く
の市民に核戦争の悲惨さ、恐ろしさを
再認識してもらいました。さらに翌年
には、(財)第五福竜丸平和協会のご好意
によって、同船の大漁旗や船員服など
も展示しました。
以来、広島市や長崎市、(財)第五福竜
丸平和協会などにご協力をいただき、

たゆみなく、全市民的な運動
市役所で毎年開く「原爆展」

八木米次

毎年七月下旬に「原爆展」を続けてい
ます。特に、昭和六十一年の「原爆展」
では、第五福竜丸の元乗組員・大石又
七さんが、当時を思い出して制作され
た船体模型を展示するとともに、大石
さん自身にもお越しを願い、貴重なお
話をしていただき、大きな反響を呼び
ました。この運動を市民レベルで取り
組み、平和への願いを実現するために、
昭和五十八年には「平和非核都市」を
宣言しました。また、シンボルマーク
の制定や、歌詞を市民から募集して、
平和の歌、愛してますか、ふるさとを、
のレコード化などをすすめてきました。

平和は、空気や水などと同じように、
平和であるという状態のときには、あ
りがたみに気付かずにいるものです。今
の時代を生きる私たちみんなが、次の
時代の平和のために汗を流さなければ
なりません。この地球上に一つの核兵
器もなく、青い空、緑の大地、
そして、おだやかな暮らし(西宮市
「平和非核都市宣言」)が実現する日
まで、西宮市の「原爆展」を、核兵器
廃絶のための運動を、全力を傾けて続
けていかなければならないと考えてい
ます。

平和への連帯が世界中に広がること
を願ってやみません。(西宮市長・原
水爆禁止西宮市協議会会長)

東北から早くも修学旅行
「平和」への心を育む

中学校・高校の見学が多くなっ
ているこの頃、新学期とともに早
くも東北・関西から中学校の修学
旅行で展示館は盛況です。秋田県
北秋田郡上小阿仁村、仁賀保町、

岩手県二戸郡、岩手郡の山村から、
滋賀県浅井郡、愛知郡、東浅井郡
から、黒潮の和歌山県紀南の中学
校から次々に来館。上小阿仁中学
校はわずかに六人。女生徒の班長
さん中心に一人三問の「質問」を
浴びせました。滋賀県の浅井中学
校百七十名の一団は、記念碑の前

で歌をうたい、決意とともに折鶴
を献納、ピースの声に合わせメッ
セージをつけた風船を空に放ちま
した。愛知郡愛東中学校は、空襲、
第五福竜丸保存の話で江東区の根
岸泉先生から聞き、全員の寄せ書
きを展示館に贈りました。和歌山
県潮岬中学校は折から取材中の和

久保山すずさんのことば

松崎志保

私は第五福竜丸を見学するにあ
たって、先生に「第五福竜丸」の
本を読んでもらいました。
印象的に思ったことは、福竜丸
が操業していたビキニ環礁近くの
洋上が、危険水域外だったという
ことです。乗組員の人たちはきつ
とだれも放射能を浴び、原爆症に
かかるとは想像もしていなかった
と思います。そしてこの水爆の実
験を行なった国の人たちも、こん
なことになるとは思わなかったか
も知れません。だからといって絶
対に許されないとはいえません。

被害はそれだけでなく、遠く離
れた日本の国土にも放射能の混じ
った雨を降らせました。私は、水
爆の威力のすごさに改めておどろ
きました。
その当時の人たちはきつと、恐
ろしい気持ちでいっぱいだったこ
とだと思います。
この水爆実験のぎせいの者、久保
山愛吉さんの妻、すずさんのこと
ばを聞いて私は心をうたれました。
「欲しいものはなにもございま
せん。欲しいものは夫の命です。
子供たちに父親をかえして下さい」
私にとっても、家族がかけがえ
のない大切なものです。世界中、
だれでもみんなそうだと思います。
第五福竜丸は、こんな悲しみを二
度とくり返してはいけなさと私た

ちに教えてくれます。
私たちは毎日、平和にくらして
います。でも、いまま私たちの知
らない所で、もっとすごい威力を
持った核兵器がどんどん開発され
ています。とてもこわくなります。
一刻も早く、世界から核兵器をな
くしたい。いまそんな気持ちでい
っぱいです。
私たちもこれから、いろいろな
勉強をして、知識を得ていくと思
います。世界の人々と平和を願
い手と手を合わせてみんなで考え
ていかなければいけないことだと思
います。
日本は、広島、長崎、第五福竜
丸と、原水爆の被害を受けてきま
した。これ以上の犠牲者をださな
いために、世界の平和を願って、
私たちはつるを折りました。(埼
玉県川口市安行小学校六年生)

歌山放送の記者のインタビューを受
け「やったあ」と歓声をあげました。
そんな中、千葉県の四街道北高
校四七〇名、磯辺高校四六〇名の
制服姿の高校生の大部隊が班毎に
見学しました。

最近、日本平和教育研究協議会
編集の『平和教育』(明治図書刊、
九〇年春季号)の連載「戦争資料
館を訪ねて」に展示館が紹介され
ましたが、展示館は「平和を考え、
核廃絶への心を育む大きな役割を
果たし続けています。」

四月二十二日、「アース・デー」
の行事の一つが夢の島公園で開か
れ約三万人の人々が参加。環境破
壊、廃棄物等に関するパネル展示
が公園いっぱいに行なわれました
が、参加者の一部が展示館を見学、
あらためて「地球と人類の生存」
を船とともに考えました。

新たに賛助会員に

最近つぎのかたがたが協会の賛
助会員になって下さいました。
大橋昭二、華山もと、宮田とも
み、松下一枝、高橋よう子、堀田
あゆみ、有馬ひとみ、長島明子、
白岩しげ子、田村清、安斎美恵子、
藤元淳子、中田矩子、児島令枝、
黒木貴代(敬称略)。

平和随想 (40)

三宅泰雄



我が国の科学者で平和問題について、深い関心を抱いていた人といえ、誰でもまず湯川秀樹と朝永振一郎の両博士のことを思い出すでしょう。いうまでもなく、この二人はいずれも京都大学の物理学科の出身(同期生、一九二九年卒)で、二人とも日本で数少ないノーベル物理学賞の受賞者でした。湯川さんは一九四九年、日本人として初めてのノーベル物理学賞を授けられました。受賞題目は「核力の理論による中間子存在の予言」でした。私が湯川さんと親しくなったのは、私がアメリカにいたときのことでした。そのころ、わが国でも原子力の研究の重要性がみとめられ、原子力委員会を新設したのは一九五六年のことでした。湯川さんは、その委員の一人に任命されて、早速、各国の原子力事情の視察のため、同じく新委員



左から、小川、坂田、朝永、湯川氏、右三宅

の藤岡由夫さん(東京教育大学教授)とともに海外に出ました。両氏は、その旅の最後に、そのころ私がいたカリフォルニア州の視察に来られました。私がいたのは、サンディエゴ市に近いカリフォルニア大学・スクリップス海洋研究所でした。この研究所では、所長が率先して両氏の歓迎会の開催を計画し、お二人を研究所に招待しました。私は歓迎会のあと、両氏と湯川夫人を近くの上品なバーにお招きし、夜遅くまで歓談しました。湯川さんとの親しい付き合いは、この時が最初でした。第二次世界大戦が終わったのは、

一九四五年で、日本の国民は一人のこらず、屈辱と貧しい生活をいられていました。そこに湯川さんの日本で初めてのノーベル賞の受賞があったことは、国民全体に大きい喜びをもたらしました。朝永さんが「量子電気力学分野での基礎研究」で、ノーベル賞を授与されたのは一九六五年のことでした。私が朝永さんと親しくなったのは、オーストリアのキッツビューエルで開かれた第三回のパグウォッシュ会議(一九五八年)の時のことでした。この会には各国から約六十人の科学者が出席し、我が国からも朝永、坂田昌一、小川岩雄および私の四人が出席しました。この会の最終会議はウィーンで開かれ、湯川さんが全体集会で挨拶をされました。この会議では、核兵器の危険性、原子戦争回避の方策、科学者の社会的責任などの問題が、熱心に討議され、結論は「ウィーン宣言」と呼ばれています。私は朝永さんと同じ部屋に泊まり、夕食後は雑談をしながら、時を過ごしました。朝永さんは一九四一年に理研から東京文理大(のちの東京教育大)に移り、最後は

学長として一九六九年に退官されました。私も一九五七年に教育大の教授に任ぜられたため、さらに親交を深めるようになりました。核兵器の出現とその危険性の回避のため、科学者が集まって、パグウォッシュ会議が開かれたのは、一九五七年のことでした。この会に出席した湯川、朝永、坂田さんたちは、パグウォッシュ会議にならない、我が国でも同じような会をせつことを考えました。最初の会は一九六二年に京都で開かれ、科学者京都会議と命名されました。この会とパグウォッシュ会議のちがいは、人文・社会科学者にも参加してもらったことです。正式な会は四回でしたが、勉強会は幾度かありました。第四回(一九八一年)のときには、朝永、坂田の両氏はすでに亡く、湯川さんも病弱となっていました。このときの声明の主な点は、非核保有国に対し、核攻撃や、核による脅しをしてはならない、核保有国は核兵器の具体的制限案を示すべきであることなどでした。最後に、科学技術者の責任の重大さを指摘しています。惜しいことに、湯川さんもその後、間もなく亡くなりました。

核の時代に生きる新鮮な高校生  
の姿を

森 康 行

ビキニ事件との再会とは思ってもならないことでした。一九八七年の暮、当時、沖繩戦の取材を行っていた私は、平和教育を進める先生方の集り「森田塾」の沖繩集会に参加し、そこで宿毛工業高校の山下教諭に出会いました。

その中で、山下教諭の、足もとから平和と青春を考えよう、という言葉が気に入り、その具体的な内容を聞いていた時、ビキニ事件のことが話されたのでした。ビキニ事件の焼津にそう遠くない掛川という所で生まれ、育ち、焼津から来る行商のおばさんや、近所に親しくしていた焼津直産の魚屋があった関係で、私には身近な事件として記憶に残っていました。また、ものごころついてからも、よく『雨の中に放射能が混っていて、直接雨に濡れると、頭がハゲるよ』などと言われたことを鮮明に覚えています。しかし、いっしょか、それがあたかも『常識』であるかのよ

うに、第五福竜丸と久保山愛吉さんのことだけが、ビキニ事件であるかのように思い込んでいました。しかし、山下教諭の話は、それまでの私のビキニ事件の認識を根底からくつがえすものでした。しかも、その調査を先生たちの指導のもとに、高校生たちが行っているというのに驚かされました。自分達が生まれもしなかった時に起った事件を高校生たちはどのように受け止めているのか。そして、ビキニ事件とは本当はどのような事件だったのか。

この時から映画化の企画は始まりました。カメラは88年、89年と二年間にわたって、高知の映画製作実行委員会の人達に助けられて、地元(宿毛・室戸をはじめ、東京・焼津・広島・長崎、そして沖繩と駆け巡りました。高校生たちはカメラを前にしても、何ら照れることもなく、憶す

ることも、気どることもなく、自分たちが住み、くらしている地元から、自分たちが青春時代に知らなければならぬことに真摯に取り組んでいる姿を見せてくれました。そこには巷間、伝えられる管理され、偏差値で輪切りにされ、友情や連帯も育ちにくいとされる現代の高校教育とは正反対のものがありません。高校生たちは学校間格差など、何ら問題にせず、地域の問題を、大人たちがうけた苦しみを自分の痛みとして感じ、と力を合せて調査活動に取り組んでいました。

或る被災漁民の方が言っていました。「最初はビキニのことなどもう黙ってしようと思っていた。しかし、高校生たちが何度も、何度も来て、熱心で真剣だった。その姿に私ら動かされた……」と。聞きとり調査の現場に何度も立ち会った機会をもちました。被災漁民の方は海の男として生きてきた人生そのままの通り、潔く語り、高校生たちも自分たちの生まれる前の歴史を追体験するかのようになり、真面目に、熱心に耳を傾けます。時代が新しい世代に受け渡されていくことを実感しました。高校生

自分たちの足もとから平和の問題を掘り起こし、考え、地道に、それぞれの個性に合わせて自分自身の生き方として平和の問題を血肉化していく彼らの活動の中に、私が過した青春時代とは異なった核の時代に生きる新鮮な高校生の姿を見る思いがしました。

そのような彼らと過す時間の中で、現在と未来に対する発見と確信が持てたことに今、喜びを感じています。この三年間のビキニ被災漁民の方々や高校生との貴重な出会いを今後の私の製作の糧とすると共に、ビキニ事件について微力ながら機会あれば訴えていきたいと思っています。最後に、高校生や映画製作実行委員会の人たちと手をとりあって一生懸命つくったこの映画を是非一人でも多くの人に見て頂きたいと思えます。(映画監督)

映画『ビキニの海は忘れない』は、一九九〇年三月完成、現在、各地で上映がすすめられています。